

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

学校教育、家庭教育の両方において大切にすべきこと

梶井大輔

かこ い だい すけ
梶 井 大 輔 さん

[略歴]

- 年 齢 48歳
- 住 所 大阪府大阪市在住
- 略 歴 宮崎県都城市出身
大阪教育大学教育学部卒、大阪教育大学大学院修了。
大阪府八尾市立小学校、大阪教育大学附属天王寺小学校、プール学院
大学、桃山学院教育大学を経て2022年4月に大谷大学教育学部着任。
専門分野は教師教育学、体育科教育学、教育方法学、和文化教育学。
- 著 作 『人間教育を進めるために：主体的・対話的で深い学びを創造する』
(ERP、83-100頁、2018年)
『「伝統や文化」に関する教育の性格と教材開発』(銀河書房、157-166
頁、2019年)
『教壇に立つ前に読んでほしい本』(東洋館出版、76-86頁、2020年)
『教職概論：人間教育の理念から学ぶ』(ミネルヴァ書房、42-58頁、
2021年)

いずれも共著

[応募動機及びコメント]

「よその子だけじゃなく、うちの子のこともやって。」と妻に言われたのは、小学校教員の頃でした。その言葉がずっと頭の片隅にありつつも、気づけば次男は小学校6年生になっていました。小学校3年生から始めた野球もなかなか上達せず、それでも真面目にコツコツ取り組む息子。そんな息子と私が取り組んだ、夢に近づくための1年間の記録が本稿です。学校教育の実践記録は何度も書いてきましたが、家庭の実践記録は初めてでした。

親子の実践記録に、勤務している大学の初代学長であった清沢満之と深い縁のあった暁鳥敏の名を冠した賞をいただき感謝申し上げます。本稿にも書きましたように、今回の実践記録はラップタイムにしかすぎません。夢という名の自分の力を精一杯に発揮したゴールタイムを目指して、親子ともども精進して参りたいと思います。

〔概要〕

本稿は、学校教育に二三年間携わる筆者が、家庭教育において意図的に「目標達成のために努力を継続していくこと」を身につけさせるために実施した一年間の実践についての報告である。学校教育に携わる中で得た知見や経験を、家庭教育で意図的に活用することはできないかと考えたのである。

筆者は、教師教育、体育科教育を専門とする研究者である。実践当時、小学校六年生であった次男の夢である「プロ野球選手になりたい」を家庭教育の中で支援するために、教師教育・体育科教育の知見や、教育者としての実践的知識を活用しながら実践を進めた。具体的には、階層的な目標と目的の設定と取り組みに対する多面的な評価である。本実践を通して息子は自分の設定した目標を達成し、日々努力することが習慣化された。また、本実践を通して息子の社会的な成長と人間的な成長を感じることができた。

本実践を通して、学校教育と家庭教育の両方において重要となることは、多面的に評価することと人間性の涵養であることを実感できた。多面的に評価することで安易な決めつけで子どもの可能性を奪うことを避けられ、子どもに関わる大人の指導についても見直すことにつながる。また、社会の中で生きる上で、社会的成功をおさめるためにも自己実現をするためにも、最終的には人間的成長が不可欠である。そして人間的成長は人生を通じて行われるものである。だからこそ、子どもの時期に行われる学校教育と家庭教育を通じての人間性の涵養が重要となる。

本実践を通じて教育の本質は「人を育てる」であると実感した。自身自身という人を育て、息子という人を育て、教育者として人を育てていくと考えると、私個人ができることは限られている。だからこそ、多くの人とのかかわりの中で互恵的に学び合い、成長していくことの大切さ

を改めて認識できた。

一、教育者としての教育 父親としての教育

学校教育に携わり、二三年になる。一六年間が小学校教員として学びのスタート期にあたる児童と共に教育について学んできた。そして現在、七年目に入った大学教員として小学校教員を目指す学生と共に教育について学んでいる。この場合の「教育」とは、学校教育を指すであろう。

一方で、二人の息子の父親として一五年目になる。子どもが活躍すると「お父さんが先生だから……。」と言われ、マイナスのことがあると「お父さんは先生のなのに……。」と周囲から言われる。親が子どもに家庭内で人間として生きていく基本的なスキルを身につけさせることを家庭教育というが、周囲の感覚としては「学校教育⇨家庭教育」なのであるか。

私自身の経験を語れば、学校教育に関しては学会やFDなどのコミュニケーションの中で学んだり、書籍や研究を通して個人として学んだりし続けてきているが、家庭教育に関しては場当たりの指導である。もちろん、小学校教員の経験で数多くの家庭の教育方法や教育方針に触れてきたため、実践的な知識は持ち合わせているだろうが、いざ自分の子どもになると情も入り、学校現場のようにはいかない。このように、父親としての実感としては「学校教育⇨家庭教育」であるが、果たしてこれは事実なのであるか。周囲が「学校教育⇨家庭教育」と感じているのならば、学校教育に携わる中で得た知見や経験を、家庭教育で意図的に活用することはできるのではないだろうか。

私は、教師教育、体育科教育を専門とする研究者である。学生や教師が成長するための方法や、スポーツ文化に子どもたちを参加させるための体育授業について研究してきた。これらで得た知見をもとに息子に人間として生きていく基本的なスキルを身につけさせることの実践を行うことは、学校教育と家庭教育の両方において重要となる教育の本質について考えるきっかけになると考えた。実践当時、小学校六年生であった

次男の夢は「プロ野球選手になりたい」であった。そこで、本実践では人間として生きていく基本的なスキルの一つを、息子の夢とも照らし合わせ「目標達成のために努力を継続していくこと」とした。

よって、本稿では父親として意図的に「目標達成のために努力を継続していくこと」を身につけさせるために実施した一年間の実践について報告し、そこから得られた結果より学校教育、家庭教育の両方で重要となる子どもを育てるための教育の本質について考察を行う。

二、目標と目的の設定

本実践は、二〇二一年三月二〇日から二〇二二年三月二五日までの、息子が小学校六年生だった時の実践である。息子は小学校三年生から野球を始め、実践開始時は野球歴四年目のシーズンであった。プレイヤーとしては、バットに当たると長打の可能性が高いが、なかなかバットにボールが当たらず、試合では三振の多いタイプであった。守備は打撃以上に苦手で、少年野球で一番守備の苦手な子どもが守る傾向のあるライトであることや、代打で打つことのみでの参加になることが多かった。

実践のスタートとして、目標設定を行った。「目標達成のために努力を継続していくこと」が今回めざすスキルであるため、その目標を設定しなければならぬ。

目標設定において、学校現場での経験をふまえ設定した。目標には「方向目標」「期待目標」「大きな目標」のように言われる方向性を示す目標と、「到達目標」「短期目標」「小さい(近い)目標」と言われる確実な到達を目指す目標がある。そして、伸びる子どもが方向性を示す目標だけでなく到達目標を設定するのに対し、そうでない子どもは方向性を示す目標のみを設定しがちであった。具体的な到達目標群の達成が方向性を示す目標の達成につながるのだが、子どもがそのことを知る由もない。だからこそ、学校現場で子どもたちに目標を設定させるときには、必ず

両方の目標を設定するようにしてきた。

息子の夢である「プロ野球選手になる」も目標であるが、これは方向性を示す目標であり、この目標を達成するためには到達目標が必要となる。そこで、表1のように年間目標と到達目標を設定した。年間目標を達成するために、到達目標をクリアするための日々の努力を継続していくことが、本実践のめざす姿となる。

また、目標設定と同時に、その目標を設定する目的についても考えさせた。「何のために目標達成を目指すのか」ということを明確にするためである。目標群をより高次の目標を達成するための段階のように考えるなら、目的は「夢を実現するため」となるであろう。しかし、方向性を示す目標は、「今の自分」から遠いものであり、努力を継続する上でモチベーションを保ちやすいとはいえない。

そこで、他者を意識した目的を設定するようにした。この他者を意識させる取り組みは、小学校教員の経験が大きい。小学校の行事で臨海学舎があった。海で五年生は三〇〇m、六年生は

表1 実践の目標と目的

夢	プロ野球選手になる。
年間目標	6年3学期に硬式野球チームのスカウトに声をかけられる選手になる。
到達目標	①スイングスピードを100km/hにする。 ②打つタイミングを合わせられるようにする。 ③捕ってから早く投げられるようにする。
目的	じいちゃん、ばあちゃんを野球で元気づける。

一〇〇〇m泳ぐ行事である。この行事のために子どもたちはプールで練習を頑張り、三〇〇mは簡単に泳げるほどの泳力をつけるのだが、足のつかない海となるとパニック状態となり、泳げなくなる子どももいた。このような時、子どもは「無理」「もうダメ」のような言葉を発する。しかし、海での練習を続け、泳げるようになると、「みんな頑張ろう！」「（ペアに対して）大丈夫！」のような言葉を発する。パニックになるときは自分に関する言葉を発し、泳げるようになると他者を励ます言葉を発するのだ。泳げるようになった自信が他者に向けられたという見方もできるだろうが、私は「他者に心配りできるような人としての成長」があったからこそ泳げるようになったと感じた。すなわち、自分自身を心配する段階から、他者を心配できる段階へ成長したからこそ、海への恐怖を克服したのだと考えた。このように考えると、「他者のために頑張るとき、人は力を発揮できる」ということになり、人という生き物の素晴らしさを感じた。

このことから、息子に目標達成のための目的を「誰かのために」という視点で考えさせたところ、「じいちゃん、ばあちゃんを野球で元気づける」と目的を設定した。当時、祖父が認知症及び鬱の傾向があり、家外にも出られないような状態になっていた。祖父の生きがいや孫の成長のようになっていたが、息子なりにそのことを感じていたのであろう。このような経緯で、「じいちゃん、ばあちゃんを野球で元気づける」という目的のもと、「六年三学期に硬式野球チームのスカウトに声をかけられる選手になる。」という目標を設定し、実践がスタートした。

三、取り組みの概要

到達目標をクリアするための日々の努力だが、具体的には次のような取り組みを行った。

三十一 努力の可視化

所属している野球チームは土日祝のみに行われていた。よって、それ以外の日に到達目標①「スイングスピードを一〇〇km/hにする。」をクリアするための個人練習と、到達目標②「打つタイミングを合わせられるようにする。」と到達目標③「捕ってから早く投げられるようにする。」を達成するための親子練習を行うことが、本実践の日々の取り組みである。

取り組みについては、図1のような表に記録し、努力したことを可視化するようにした。二週間（二〇日間）で努力の達成率を確認できるようにし、気のゆるみや活動の停滞も可視化できるようにした。

日：朝一守備練習 ター撃練習 月：朝一守備練習 ター撃練習 水：素振り（ヘッドスピード）
木：素振り（フォーム）か鴨野・金：朝一守備練習 ターランニング

月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	達成率
6月7日	6月8日	6月9日	6月10日	6月11日	6月14日	6月15日	6月16日	6月17日	6月18日	10/10
6月21日	6月22日	6月23日	6月24日	6月25日	6月28日	6月29日	6月30日	7月1日	7月2日	1/10
7月5日	7月6日	7月7日	7月8日	7月9日	7月12日	7月13日	7月14日	7月15日	7月16日	1/10
7月19日	7月20日	7月21日	7月22日	7月23日	7月26日	7月27日	7月28日	7月29日	7月30日	1/10
8月2日	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月9日	8月10日	8月11日	8月12日	8月13日	1/10
8月9日	8月10日	8月11日	8月12日	8月13日	8月16日	8月17日	8月18日	8月19日	8月20日	1/10
8月23日	8月24日	8月25日	8月26日	8月27日	8月30日	8月31日	9月1日	9月2日	9月3日	1/10
9月6日	9月7日	9月8日	9月9日	9月10日	9月13日	9月14日	9月15日	9月16日	9月17日	1/10
9月20日	9月21日	9月22日	9月23日	9月24日	9月27日	9月28日	9月29日	9月30日	10月1日	1/10
9月27日	9月28日	9月29日	9月30日	10月1日	10月4日	10月5日	10月6日	10月7日	10月8日	1/10

目標：100日努力して継続力を身につける⇒6年生3学期にスカウトに声を掛けられる選手になる

図1 練習記録表

三十二 試合のための準備・ふり返り

表1で示した目標・目的のもと、息子は日々練習をするのだが、そもそも「なぜ練習をするのか」と言えば「試合で自分のもつ力を十分に発揮するため」である。やはり、子どもにとって（スポーツをする者にとつて）試合があるからこそ練習をするのであって、試合の結果が練習のモチベーションにつながる。しかし、試合は相手があつて成り立つ。相手の方が能力的に高ければ、力を十分に発揮できないこともあるだろうし、能力以外にもその時の運や状況に左右される。そのため、試合での結果は練習の成果を確認できる場となるが、必ずしも練習の成果を適切に評価してくれるとは限らない。

そこで、単に試合に臨むのではなく、毎回の試合で自分の練習の成果を十分に発揮できるような準備と、試合の結果から自分の課題を明らかにし、それを日々の練習につなげるようなふり返りを行うようにした。

試合のための準備とは、試合の前日に図2のようなシートに試合開始

時間	身体的な準備	精神的な準備
4:45	起床	
5:00	身体ウォーミングアップ ・ストレッチ	気持ちのウォーミングアップ ・世を聞く ・玉のバウリングを見る。
5:15	朝食	世を聞く
5:30	荷物準備	
6:10	家を出発	
6:30	鴨野グラウンド到着 試合前練習直前	
	試合前練習最中	かきぬいて、いいバウ でバウリングがね。
	試合直前	声を出す。
10:40	試合開始	落ちつく

◎パフォーマンス目標

勝敗 勝つ
成績 1本ホームラン
技術 力強い

◎メンタル目標

かきぬきながら試合十分

図2 試合当日準備表

試合結果		5-1で月勝利	
個人結果		1打数0安打 2打点	
	今回のよかった点	今回の問題点	次回成功のための対策・決意
心理面	声が出ていた。	試合前私を していた。	体を動かして お風呂を 入る。
技術面	かまが良かった。	前回は だった。	手はボールを たたく感覚を 感覚をみつけた。 (つこま感覚)
体力面	試合で薬が とどろけた。	試合後めんど たかた。	よくなる
生活面	シートでドリンクが 残っていた。	走っていない	走る

図3 ふり返しシート

までの自分のすることを計画することである。試合では「心技体」の充実が重要となるが、特に「心」精神的な部分が大きな影響をもつ。緊張のために自分の力が発揮できないことは、誰もが経験することである。そこで、試合開始までの、自分の精神的な準備をすることを前日に計画し、当日はそれを意図的に実行するようにした。このような取り組みを行うことで、結果に左右されたり、偶然の出来事に一喜一憂したりするのではなく、意図的に試合に臨むように意識づけられるようにした。

試合後のふり返しとは、図3のようなシートに試合での「よかった点」「問題点」「次回への対策・決意」を「心理面」「技術面」「体力面」「生活面」の項目ごとに記述することである。

このふり返しは二つの意図で行った。一つ目が、自己との対話のためである。試合中は指導者からの言葉や自分自身の声など様々な言葉で溢れている。その言葉に影響を受けつつ試合中はプレーするが、試合が終わるとその言葉を忘れやすい。そのため、試合後に書くという活動を取

り入れることによって、自分自身と対話しながら試合を振り返ることで自らの良さや課題を明確にできると考えた。二つ目が、試合の結果を引きずらないためである。試合では良い時もあれば悪い時もある。その結果に引きずられると、目の前(今)の試合が過去の試合に影響を受ける。大切なのは過去の結果ではなく、「今ここ」にある試合であることを意識させるためにこの取り組みを行った。

四、努力の結果

本実践の結果から述べると、年間目標であった「六年三学期に硬式野球チームのスカウトに声をかけられる選手になる。」を達成し、中学校から硬式野球チームに所属している。日々の練習についても図1の練習記録表が二枚目(二〇〇日分)を過ぎると習慣化し、チェックをしなくても毎日のルーティンとして自主的に練習するようになった。これだけ読むと、本実践で目指した「目標達成のために努力を継続していくこと」を達成したことになる。また、一般的に言われる「努力はうそをつかない」「やればできる」のような格言を息子が体感したことになる。しかし、実際は努力が即結果に結びつくものではなく、結果として目標達成したというのが現状であった。その詳細を述べる。

四-1 数値化の効果、留意点

図4はスイングスピードの推移を示したものである。結果としては到達目標①であった「スイングスピードを一〇〇km/hにする。」を達成できたが、達成までに七カ月間かかっている。最高速度、平均速度とも一〇〇km/hを超えたのは一二月であったが、次の月には平均速度は一〇〇km/hを下回り、再び超えるのは実践最終の三月であった。今回、バッティングスピードを測った機器は、家庭用に市販されているものであった。現在、機器とスマートフォンの組み合わせで、様々な

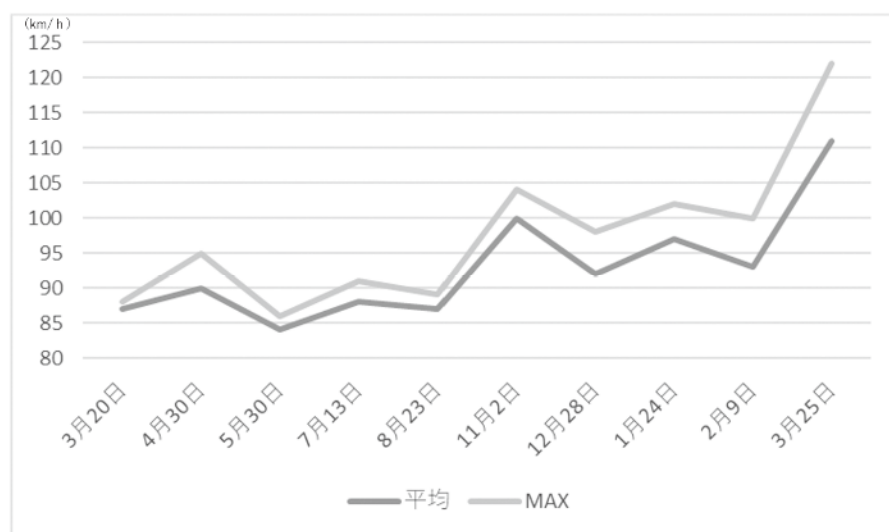


図4 スイングスピードの推移

運動の結果を数値化できるようになっている。このことは、子どものパフォーマンスを印象論で語るのではなく、客観的に評価することにつながる。また、子どもにとっても目標を明確にすることができ、努力することの励みになるであろう。

しかし、努力することの難しさは、努力すればその成果が比例関係のように伸びるのではなく、図4のように等比級数的な上昇カーブを描くことである。すなわち、努力しても成果が表れない時期が一定期間ある

ということである。数値化によって運動の結果が明確になるということは、成果を明確にする一方で、成果が出ていないことも明確になる。図4でも三月に一気に記録が伸びているように、努力を継続すれば必ず結果が出る。しかし、結果が出ない一定期間があるために途中であきらめてしまうことにもつながる。「努力はうそをつかない」「やればできる」ということは事実であるが、「途中で結果が出なくても」の言葉が加わる。数値化によって、結果が出ないことも明確になるが、そのような中でも努力を継続することに価値が生まれる。今回、年間目標を到達できた要因の一つは、七カ月間結果が出ない中でも途中であきらめなかったことといえるであろう。

四二二の成長

表2は、四か月ごとの試合での打撃結果である。コロナ禍の影響で試合数が少なかったとはいえ、一番よかったのは努力を始めた最初の時期である。試合の結果であるため、もちろん数字に表れないこともたくさんある。例えば、後半の試合になればなるほど、準決勝や決勝戦となり、相手投手のレベルが高くなっていった。しかし、お世辞にもスカウトされるような成績ではない。なぜ、結果的に年間目標を達成できたのだろうか。それは今回の実践を通して二つの成長があったからと考えられる。

一つ目が、社会的な成長である。すなわち、チーム内での評価や見られ方が変

表2 公式試合の4か月ごとの結果

項目	4~7月	8~11月	12~3月	計
打数	11	33	22	66
打率	.272	.212	.227	.227
長打率	.455	.273	.318	.318
打点	2	5	2	9

わった。六年生最後の卒団式で、指導者から「チーム一の努力家。一年間で一番伸びた選手」の言葉をもらったように、指導者から成長を認められた。試合では華々しい結果を出していないにもかかわらず、八番などの下位打線から五番などの上位打線になったり、ライトだったポジションも内野のサードを守るような試合もあつたりした。これは、試合の姿だけでなく、練習の姿も評価されたからと考えられる。練習の姿はチームメイトからも評価もされ、「当たったら、めっちゃくちゃ飛ばす選手」のような位置づけになった。このように、個人の目標達成のための努力であつたが、結果的にチーム内での成長、つまり社会的な成長につながつたといえる。

二つ目が、人間的な成長である。本実践を始めてから、息子の野球に対する取り組み方が変わった。練習には誰よりも早く行き、練習終了後は祖父母宅に寄つて祖父と会話をして帰る。練習の合間にも素振りなど自主的な練習をし、道具の片付け等を率先して行う。これらのことは、表2のような試合の結果には表れないことだが、野球に取り組む態度として誰もが感じるものである。

よつて、試合の結果としては華々しいものはなかつたが、社会的な成長と人間的な成長がチームの指導者の目に留まり、硬式野球部の指導者への推薦等につながつたのではないかと推測される。

五、学校教育、家庭教育の両方で大切なこと

本実践では、私は父親として「目標達成のために努力を継続していくこと」を一年間の体験を通して教え、息子は「六年三学期に硬式野球チームのスカウトに声をかけられる選手になる。」という年間目標を達成することができた。この結果には運や偶然の要素も多分にあるが、なぜ目標達成できたのかと考えたとき、学校教育と家庭教育の両方で、すなわち教育において重要となる二つのポイントが挙げられる。それは、「多面的

に評価する」と「人間性の涵養」である。以下、詳細を述べる。

五-1 多面的に評価する

本実践では、年間目標と到達目標を設定し、その目標達成のために日々の取り組みを行った。その取り組みに対して、複数の評価する場を設定した。継続するという態度を評価する練習記録表(図1)、到達目標①の達成率を確認するスピード測定(図4)、到達目標②③の状況を把握する試合での打撃結果の記録(表2)、試合結果に対する自己評価のためのふり返しシート(図3)、そして親子練習や試合後における私からの直接的な評価と映像を記録したポートフォリオ評価である。息子の努力している行為および内容に対して様々な視点で評価したのである。また、評価の方法も数値で具体的に表したり、文字や言語で数値では読み取れないことを表したりした。もしも、これが一面的な評価のみであつたら、きつと努力を継続することができなかつただろう。なぜなら、バットスピードに関しても、試合での打撃結果にしても先述のように一年間のほとんどは結果が出ていなかったからである。客観的に息子を見て、努力が実つたと感じながら野球をしていたのは、実践終盤の二月末から三月であつたと思う。裏返せば、一〇カ月間は思うような結果が出ない中の努力であつた。思うような結果が出ない中でも、多面的に評価することでわずかな成長や伸びを確認できたことが、日々の努力のモチベーションにつながつたといえる。

また、多面的な評価は、子どもに関わる大人が多面的な見方で子どもに関わることにもつながる。現在、教育界では「指導と評価の一体化」の大切さが言われているが、評価するということは指導を見直すことでもある。多面的に評価するということは多面的に指導を見直すことである。今回の実践でも多面的に評価をしていなかったら、試合の打撃結果のみに着目して叱咤激励をしていただろう。自分の指導をふり返

することもせずに。今回の実践を通して、打撃理論の書籍を読み直したり、新たな打撃理論や身体の動かし方を知ったりと私自身も学ぶことができた。そして、何より息子のそれまで知らなかった面を知ることができた。家庭教育では学校教育のように児童観を考えるとといった子どものことをより深く知ろうとすることはない。家族がゆえに「知っているつもり」「わかっているつもり」になっているからだ。今回の実践でも、息子の意外な部分を多く知ることができた。

現在、息子は中学生になり硬式野球部に所属しているが、小学校までとは異なるボールやバットなど環境が変わった中でプレーしている。そのような中、八月末までの試合での打撃結果は、打率：四〇七、長打率：五九三、打点：八の結果であり、小学校の時よりも大きく伸びている。小学生の頃の姿からは予想できなかった成長である。実践が終わったことや小学校を卒業したことは、息子の努力の終わりを告げるものではなく、息子の中では全てが継続中なのだ。子どもは成長の途中であり、その時々々の結果も過程の結果である。つまり、子どもの結果はラップタイムであって、ゴールタイムではない。その時々々の結果で大人が一喜一憂するのはなく、子どものゴールタイムのためにどのように支援していくのかが重要となる。そのためには、一部分だけで子どもを見て判断するのではなく、多面的に見て適切な支援を選択することが必要となる。

「やればできる」の言葉は、「やる」という行為に注目しがちだが、実は「できる」ということをどのように評価するのかということも重要になるのではないか。多面的に評価するからこそ、その子なりの「できる」に気づける。学校教育でも家庭教育でも、子どもに関わる大人が「やっでできるようになってきていることをできていない」と評価することや、安易な決めつけで子どもの可能性を奪うことを絶対に避けるためにも、多面的な評価が重要となる。

五二一 人間性の涵養

二〇二〇年から実施されている学習指導要領では「人間性等の涵養」がうたわれているが、「涵養」の言葉に真に人間性を育成しようとする気概を感じる。涵養を広辞苑では「自然に水がしみこむように徐々に養い育てること」と説明している。人間性の育成は即時的ではなく、また限られた場所だけで完結するものではないことを示している。つまり、学校や家庭という時間や空間に限定されるのではなく、子どもの生活場面すべてで人間性の育成の実現が図られる。今回、家庭教育において「目標達成のために努力を継続していくこと」をめざしたが、これが家庭内だけで終わるのならば、「好きなことに関しての目標達成のために努力を継続していくこと」を学んだことになる。よって、息子の人生で考えるならば、野球の練習を通して「目標達成のために努力を継続していくこと」の体験で学んだことが、今後の人生における自分自身の成長につながってこそ真に学んだことになる。

本実践を通して、息子の社会的な成長と人間的な成長が見られたことは先に述べた通りだが、教育者としても父親としてもうれしかったのは人間的成長である。息子は中学生になった今でも日々の努力を行っているが、それと同様に今でも継続していることが練習の帰りに祖父母宅に寄ることである。六年生の頃は、息子の練習を見るために家を出られるようになった時期もあった祖父だが、今では全く出られなくなった。そのような祖父の楽しみは孫に会うことだが、その楽しみを毎週叶えている。六年生の時に目的として設定した「じいちゃん、ばあちゃんを野球で元気づける。」は今でも息子の心の中にあるようだ。すなわち、自分の成長の過程には多くの人の励ましや支援があることや、自分自身も周囲の人に何かしらの形で寄与できることを学んでいる。

今回の実践で息子は「六年三学期に硬式野球チームのスカウトに声をかけられる選手になる。」という目標達成をしたが、これは一般的には社

会的成功となるであろう。しかし、先に述べた通りプレイヤーとして技術的な成長よりも野球に対する取り組み姿を指導者に認められた部分が大きく、目標達成の要因は人間的成長である。社会で生きる上で、社会的成功をおさめるためにも自己実現するためにも、最終的には人間的成長が不可欠である。そして人間的成長は人生を通じて行われるものである。だからこそ、子どもの時期に行われる学校教育と家庭教育を通じての人間性の涵養が重要となる。

六、おわりに

本実践は、学校教育と家庭教育の両方において重要となる教育の本質について考えるきっかけになればとスタートしたが、私の答えは「人を育てる」である。当たり前のことかもしれないが、「涵養」の言葉の通り「人を育てる」には時間がかかり、かつ何が正しいのかもその時にはよく分からない。本稿は一年間の実践の報告だが、息子の夢に向かっての日々は継続中である。その息子に関わる私の人生も継続中である。自分自身という人を育てつつ、息子という人を育てる。そして、教育者として人を育てていると考えたと、私個人ができることは限られている。だからこそ、多くの人とのかわりの中で互恵的に学び合い、成長していくのだといえる。本実践もふり返れば、家庭教育といいながらも多くの人たちが息子の成長を支援してくださった。支援に感謝するとともに、今後も共に学び合い、成長していく人との縁を大切にしていきたい。